

精神分析学と幼児の教育 (II)

— 心の構造と性格の形成 —

北見芳雄



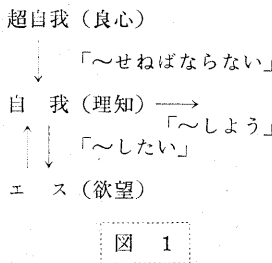
一 心の構造と性格

前回述べたごとく精神分析学は、フロイドが意識の背後に無意識を発見し、神経症の症状や正常心理のいろいろな現われをもこの二つの心理過程の関連から捕えたことに始るが、その後意識と無意識の相互関連や働きあいが更に細く研究された結果、現代精神分析学の基礎となっている、自我、エス(イド)、超自我という精神構造に關する新しい概念が導入され、精神分析学は従来の無意識(深層)心理学から、自我を中心に心の構造や機能を力動的に考察してゆく自我心理学に変容することとなり、心理学や教育との関係がいよいよ深められることとなった。

(1) エス(イド) 心の深部を構成している無意識的な部分で、本能的衝動や欲求の世界。

エスの衝動は絶えずその充足を求めて意識化しよう(↕)として

いるが、その性質上自我の抑圧(↓)をこうむりやすい。エスを支配する傾向は快感を求め不快感を却けるといふ、いわゆる快感原則であり、誕生直後の赤子の精神状態がこれに近いとみられる。(図1)から出て意識に現われようとする衝動を自我が受容することの危険を自我に警告する(↓) 批判的検査的な役割をもつ。(超自我については後に再びとりあげる)



自我 いわば「良知」の世界にでも相当する主として意識的な心の部分で超自我(良心)とエス(欲望)の二つの葛藤(↕↕)を調節して現実的の一つの意志を決定する(→) 役割をもつ正に人格

的存在で、現実外界への顧慮の上に欲求の充足を求めようとする現実原則に支配されている。

精神分析学ではこのように、心には三つの部分があり、その相互関連から日常の行動や性格の相違、異常心理のあり方などが決められてくると考える。

今、我々が他家を訪問して珍しいお菓子の接待をうけた場面を想像してみよう。この場合我々のエスは共通して「食べたい」という欲求を起すが、その後の動きは人格の発達程度や性格の相違で変わってくる。まだ自我や超自我の未成熟な幼児は、快感原則（エス）のままに「欲しい欲しい」と駄々をこねて母親を当惑させるかもしれないが、一般のおとなの自我は既に長年の経験からこういう場面の円満な現実原則的な解決法を心得ているので、自我は一応エスの欲求を抑制しておいて、「どうぞ召し上れ」の声を聞いてから、謝意を表して（超自我の要求を充してから初めて）手を出すことであろう。しかし同じおとなでも古風な、超自我の強い人になると最後まで遠慮をおし通して、初めの欲求を抑えてしまうこともあるかもしれない。このように日常の細かな心理や行動に、自我、エス、超自我の動きが反影されているわけである。こう考えると、聖人孔子が七十才に達した時に「己（自我）の欲する（エス）ところに従って則（超自我）を越えず」と表現した心境は正にこれら三つの心の部分が円満に統一のとれた理想的な人格のあり方を示しているということになる。

同じく性格の型もこの立場から次のように分類することができよ

う。

(1) エスの性格 主として欲望が行動を方向づける、衝動的、解放的な性格。いわゆる芸術家タイプや「すいも甘いもかみかけた人」などはそのよい現れであり、「手くせの悪い」、犯罪者などはその悪い現われとみられる。

(2) 超自我的性格 良心が中心の、道徳的規範でいつも動く、とかく反省がちな人。（「君子は日に三省す」）度を越すと禁欲的ともなる。

(3) 自我的性格 自我的動きが中心となる人、さっぱりした人、わりきった人、悪くいうとチャッカリした人、ドライな人、物事をわりきる合理的な態度が特徴となる。

(4) ノイローゼ的性格 心の三つの部分の間のバランスがとれない人、エスと超自我の圧力が激しく、自我はその板ばさみとなり動きがとれず迷い、悩みなどが多くなる。もちろん以上は極めて便宜的な性格の分類で現在の精神分析学ではもっと力動的な特徴を捕えるの性格類型が考えられている。

二 超自我と良心

超自我は当然人間の道徳性の根元としての高尚な機能を果すものであるが、また超自我イコール良心とは言えない場合がある。というのは超自我が特に過敏で厳格すぎると、不合理な罪悪感や不安に悩まされやすくノイローゼの原因となりうるからである。精神分析

学では我々の良心の働き即ち道徳性には次の二つの型があるとみて
いる。

(1) 超自我・自我の同調的な道徳性 道徳を代表する超自我と理
知を代表する自我とが仲よく調和を保っている、いわば理性的良心
の型。合理的な、理性の納得がいく道徳感で動く健康な道徳性。

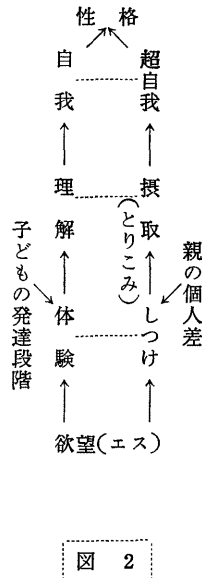
(2) 超自我、自我が相葛藤する道徳性 超自我が自我を威圧し、
自我が罪悪感に悩まされやすい、いわゆる良心過敏型の「良心的す
ぎる」場合。

「良心的すぎる」とはおかしな表現であるが、事実ノイローゼの
人の多くは非常に良心的である。精神分析学ではこういう、患者に
強度の不安を与え心の平和をかきみだす厳しすぎる良心を「悪良心」
とよぶが、こういう場合治療の目標は、この厳しすぎる超自我を緩
めてもっと合理的な良心活動に置き換えさせることにおかれるので
ある。ここに良心を作る躰けや道徳教育の難しさがあり、自我と同
調的な良心を養成すべきところを逆に自我と葛藤する良心を作ると
なると、それは時にはノイローゼを養成することでもあり、更には
後の不良や犯罪というような非行の原因ともなりうるのである。超
自我と自我との争いが激しい場合には罪悪感や劣等感に苦しめら
れ、心の平衡がみだされる結果は外部への攻撃となり、ここに理由
なき反抗、ふてくされといった態度が生れるからである。

三 幼児の性格形成

次に、前述した心の構造が幼児にどのようなようにして形成されるかと
いう、精神分析的発達心理学について若干述べてみよう。

誕生直後の赤ん坊は欲望（エス）だけの存在で殆んど無意識の状
態とみられるが、その後現実外界にふれる（体験）ことから乳児に
次第に自我ができ意識が発生してくる。（図2）



自我のでき方には当然子どもにも共通した発達段階が存在し、幼児
はその法則の上に漸次外界を理解し知慧を身につける。これに対し
て親の躰けのあり方は社会的習慣によりまた親個人の性格や育児方
針によって広い個人差がみられる。厳格に時間を計って授乳する母
親もあり、欲するままに無制限に与える寛大な親もある。この個人
差は排泄、清潔、愛情の共有、礼儀作法など幼児に課される総ての
躰けのあり方に現れてくる。

躰けは幼児の欲望を制限することになるため、幼児は当初躰けに
さからい多かれ少なかれむずかかったり反抗したりするが、こういう
状態を繰り返しているうちに、幼児は序々に親の躰けを自己の中に
摂り入れて、自分からすすんで親の躰けに従うようになって、いわ

ゆる物わかりがよくなるのであるが、その理由またはそこに働く心理には大きく二つの場合が考えられる。

(1) 親にもっと可愛がりたいという子ども自身の願望から親の躰けをとりいれる型であり、この場合は、幼児にとっての最大の願望である親の愛情との、いわは引き替えに親のよろこぶ躰けを受けいれるのであり、この際の子どもには親に、より愛されたいという積極的願望が働いているわけである。

(2) 親がこわいから、親に罰せられるからという、幼児がいわば無理やりに親の躰けをうのみにさせられる場合であり、この際には、子どもは親にもつ恐怖、不安に対する消極的防衛策として親の躰けをうけいれることになる。罰といっても必ずしも体罰を意味しない。子どもの発達段階や理解力を無視した高すぎる要求や、時間をかけない短兵急な躰けの態度をとった場合もこれに当るのである。

この二つの躰けの型を前に述べた道徳性の型に対比してみると、(1)のような、子どもの自発性に訴える躰けの態度は、自我と同調的な好ましい良心を作るものとなるし、(2)のような、抑圧的な躰けは子どもの自我を萎縮させるような病理的な良心を作ることとなり後年の困った性格問題やノイローゼの因となりうるのである。

このように精神分析学では幼児期に、子どもに自発的に形成される自我と、それとは一応別個に親の躰けを撰取することによって形成された超自我という、この二つのあり方が相関連をもちつつ次第に統合されて性格の基礎的な型が五、六才までに決定されるとする。

したがって親が子どもの発達段階に裏つけられた体験の程度を、充分考慮しつつ子どもの自我に漸次適切な躰けを支えた場合は、子どもはその理解力に応じて積極的に親の躰けを撰取して、子どもの自我も超自我も充分にそして調和的に発達した好ましい性格の基礎を作りあげるが、これに反して、親が幼児の自我の発達段階に相応した躰けを与えなかったりまたは一方的な高すぎる躰けを行なった場合は、子どもの自我と超自我の発達にズレや不調和が生じて種々な好ましからぬ性格を作りあけるとするのである。

四 幼児教育の意義

以上に述べた精神分析学でのみ方からすると、古米からいわれてきた「三つ子の魂百まで」という諺には大きな科学的真理が含まれており、人間の一生の幸・不幸を支配する性格の基本的な型が幼児期の家庭環境や親の態度から、しかも殆んど子どもにとっては受動的に作られることになり、この時期の親の責任は誠に大きいと言わべきであるが、また他方現実問題として存在する家庭環境や親の性格や教養の個人差の広さを考えると、性格形成期の幼児を対象とする稚る幼稚園教育の意義とその効果には、極めて大きなものがあるといえるのである。

(東京理科大学、東京教育・精神衛生研究所)

* * *